

野母崎夢塾





塾長 三浦 豪介

■ 塾長コメント ■

平成 28 年度に引き続き、今年度も活動を継続させていただくことができました。社会人の活動が、時間的にかなり制約があることが昨年度の活動を通してわかったため、今年度はより活動がしやすいように部活動形式として、個人もしくは小グループでの活動(以下「部活」という。)を試みしたので、活動範囲は地理的にも内容的にも幅を広げることができました。反面、時間不足で部活動から得られたものをなんらかのカタチにする時間が足りなくなってしまうました。それでも得られた情報を一箇所にまとめることができれば、何かが見えてくるのではないかということになり、ネット上の地図に活動を落とし込んでみることにしました。これは思った以上に効果があったように思います。地図に落とし込んだ結果をみると、長崎半島の先端部を万遍なく埋めてしまうほど、野母崎が魅力を持った場所であることを再認識できました。今年こそやろうと思っていた 50 年後の未来については、年が明けて話し合いを始めたのですが、これは今後、時間をかけて考えていくことになりそうです。

■ 塾の目的 ■

今年度は野母崎地区にしかない魅力を発掘していくことを目的としました。そして野母崎地区に住んでいなければできないことを数多く発

見し、それらをもとに野母崎地区の暮らし方や楽しみ方を実践し、また外部に発信することとしました。

昨年度の活動では、野母崎地区の魅力は、自然環境をうまく活かす活動等がふさわしく、50 年後の姿を考えるうえでも、その自然環境をきちんと残し伝えていくことは欠かすことができない大切な要素だという意見もありました。

“日本最古に迫る古い岩石”をはじめ今後も野母崎にしかない魅力的な素材が見つかる可能性を視野に入れ、それらを町の未来に活かしていくことも考えていきたいと思っています。

■ 塾の研究・活動内容 ■

今年度は「活動と発信」の同時進行に力を注ぎたいと考えました。その手法として、塾内にいくつかの活動(研究)グループをつくり部活動的に少人数で活動することを基本に据え、その楽しさを塾内に広げ、インターネットなどとともにリアルな関係を利用して塾外に飛び出させることとしました。もう一方で空き家の増加、人口流出と目の前にある現実的な課題もあるため、先進地視察などにより事例を勉強することにしました。

■ 塾活動の成果 ■

今年度の継続申請にあたり

①イベントを通して市民の輪をひろげるとともに野母崎地区の魅力を知ってもらい、ふるさとである長崎市の魅力を一人でも多くの市民に発信する。

②長崎市の他地区でも、地区の特徴を活かしたアイデア次第で実行できることを見つけ出すきっかけをつくる。

③野母崎に住む魅力を知ってもらうことにより、野母崎地区からの人口流出を少なくし、U ターン、I ターンによる人口増、ひいては長崎市全体の人口減の歯止めをしたい。この 3 点を

今年度の塾の貢献性としてあげました。

実際の活動としては、6月4日に塾メンバーが主催する『あしぶね作りワークショップ IN 長崎・野母崎 2017』へのイベント協力を皮切りに全員で幾つかのイベントを開催するとともに、グループでは部活を行ない、ホームページや Facebook ページを利用して、発見したものを広めるようにしました。また、塾生でもある地域おこし協力隊員の活動とリンクする部分もあり、隊員を取材する新聞やテレビなどで運良く塾イベントなども話題にさせていただいたりもしました。塾生の多くが個人的に参加していたウミガメ産卵ふ化見守りなども話題の一つでしたし、後日、塾主催でムーンライトウォークイベントを行った際には、月夜の砂浜で散歩を楽しみながらウミガメの産卵場所などを月明かりで確認していただくなど、市民の方たちにも野母崎の自然の豊かさを体感していただきました。

更に、イベントや部活を行ったそれぞれの場所をネット上の地図に情報とともにプロットしたのが下の地図です。

伝統行事などの時期や土地の歴史、特徴なども解るようにしていますので伝習所「塾」事業を離れたあとも情報を加えながら野母崎地区の情報発信の一つとして充実させ役立てていく予

定です。

先進地視察では空き家活動を通して移住促進を図っている熊本県小国町に行きました。いろいろな面で野母崎地区とは共通する部分の少ない町でしたが、空き家や就職先などの情報の提供方法、民間と行政が協力しあう取り組み方など野母崎地区でも活かせることも多く、とても勉強になりましたので今後につなげていきたいと思えます。

長崎伝習所「塾」事業での2年間の塾活動では、新しい出会いが生まれ新しい仲間たちと個人だけではできなかった活動を行なうことができ、野母崎地区で数多くの魅力を発見することができましたことに感謝しております。

これからも引き続き部活などを行ないながら、野母崎の魅力を発見し発信していきたいと考えています。

野母崎夢塾 Facebook ページ

<https://www.facebook.com/nomoyume/>



野母崎夢塾ホームページ

<http://nomozaki.yumejyuku.jp/>



野母崎夢塾 活動記録

日 時	場 所	内 容
平成 29 年		
5月9日(火)	コミュニティカフェ Ripple	第0回 プレ塾会議
5月16日(火)	長崎歴史文化博物館	長崎伝習所「塾」開所式、第1回 塾会議
6月4日(日)	脇岬海水浴場	イベント協力『あしぶね作りワークショップ IN 長崎・野母崎 2017』
6月13日(火)	コミュニティカフェ Ripple	第2回 塾定例会議
7月11日(火)	おおとり丸	第3回 塾定例会議
8月5日(土)	脇岬地区各所	第4回 「着物さるく」プレ
8月18日(金)	野母崎行政センター応接室	第5回 塾定例会議
8月29日(火)	脇岬海水浴場砂浜	第6回 塾臨時会議：イベント詳細について
9月12日(火)	野母崎行政センター応接室	第7回 塾定例会議
10月3日(火)	脇岬海水浴場砂浜	「ムーンライトウォーク」プレ
10月8日(日)	脇岬海水浴場砂浜	「ムーンライトウォーク」イベント実施
10月15日(日)	脇岬地区各所	「のもざき着物さるく」イベント実施
10月26日(木)	市民活動センター「ランタナ」	長崎伝習所中間報告会
11月7日(火)	野母崎地域センター応接室	第8回 塾定例会議
11月17日(金)	高浜 Nomon's Cafe	「海辺の映画館」設営準備
11月18日(土)	高浜 Nomon's Cafe	「海辺の映画館」イベント実施
12月9日(土)	熊本県小国町	小国町視察1日目
12月10日(日)	熊本県小国町	小国町視察2日目
12月13日(水)	野母崎地域センター応接室	第9回 塾定例会議
平成 30 年		
1月9日(火)	野母崎地域センター応接室	第10回 塾定例会議
2月13日(火)	野母崎地域センター応接室	第11回 塾定例会議
2月22日(木)	野母崎地域センター応接室	第12回 塾定例会議
3月13日(火)	野母崎地域センター応接室	第13回 塾臨時会議
3月21日 (水、祝日)	ベルナード観光通り	長崎伝習所まつり 調査内容パネルの展示、ワークショップなどを実施

ムーンライトウォーキング

野母崎は町の灯りが少なく空気も澄んでおり、市街地からのアクセスが1時間以内であるにも関わらず天の川が見られるといった、天体観測の好条件がそろった地区です。また、2017年には脇岬海水浴場で3年ぶりとなるアカウミガメの産卵が確認されました。ウミガメの産卵やふ化には、月や人工の灯りが影響しているといわれます。そこで、中秋の名月に合わせ、野母崎の月明りを体感しながら、アカウミガメの産卵からふ化・脱出を学ぶ自然学習イベントを開催しました。



会場では、まず、コミュニティカフェ Ripple 内で、この年のウミガメ上陸産卵の経緯を、写真と動画で解説しました。この年ウミガメの上陸跡が確認されたのは6回ですが、そのうち産卵に成功したのは1回だけ。カメが5回上陸したのは、いずれも人工の光が届かない真っ暗なところでした。しかし、それらの場所は、広い階段や防潮堤が光を遮るいっぽうで、浜の奥行が狭く、卵が海水に浸かってしまうため、カメは産卵を諦めて海に戻ってしまいました。産卵が成功したのは、外灯の灯りが届く明るい浜です。光を嫌うカメにとっては望ましくない場所でしょうが、反面、ここは長さ約2kmに及ぶ砂浜の中で、唯一、大潮の満潮時でも海水に浸らない場所です。

実は、3年前に産卵が行われたのも、ここと同じ場所でした。しかしそのときは、卵は

無事に^{かえ}孵ったものの、出てきた子ガメは海と反対方向にある外灯の灯りに寄って行ってしまい、迷い歩くうちにそのほとんどが獣や鳥に食べられてしまいました。2017年はそうならないよう、ふ化・脱出した子ガメをあえて懐中電灯で海に誘導しました。これらの解説は、「どこに灯りがあってカメがどう動いたか」砂浜で実際に迎るととても解りやすく、参加者の皆さんからなるほどという声が多数上がりました。当日は親子連れからご年配の方まで21名が参加し、少人数ながら質問も多く充実した時間を楽しんでいただけました。しかし雨天延期したため月の出の時間が遅れ、目的のひとつである「月明かりを楽しむ」ことができたのがイベント終盤になってしまったのは、反省すべき点でした。そのような中、特に子ども達の反応からは学ぶ点が多くありました。解説を逐一メモに取っていた小学生の女の子は、イベントで学んだことをまとめて学校に提出したそうです。また、暗いからこそ、砂浜を走る夜行性の生き物や、足跡を気にして質問してくる子もいました。このイベントを開催するにあたって私達主催者は「砂浜は月明かりの下でも安全に歩ける」という利点に注目したのですが、子ども達の姿勢から、砂浜が自然学習において非常に有効な場になるという可能性に気づかされました。

人間が安全に暮らすために作られた人工物が、いっぽうではウミガメのような野生動物の命を脅かしていることもある。このことを、生で体験・観察できる野母崎は、全国的にみても貴重な土地です。この資源を財産として活用し、人間と自然がどう関わっているのか・今後どう関わっていったらいいのか、考えるきっかけとなる活動を、今後も重ねていきたいと思います。 (山本春菜)

海辺の映画館 2017@高浜アイランド



(上映作品) 「縄文号とパクール号の航海」

去年は脇浜海水浴場で実施した海辺の映画館。今年は場所を高浜海水浴場へと移して行いました。高浜海水浴場からは世界遺産となった端島(軍艦島)が正面に見え、水平線に落ちる夕陽を眺めることができるスポットです。

今回は映画を制作した水本監督を招き、講演と映画上映の二部構成で行いました。上映時間、日没、帰宅時間等色々な事を議論した結果、上映前に講演、その後映画鑑賞という形をとりました。

上映当日は、風が強く寒い日でしたが定員いっぱいとなり、小さなお子さんから大人までたくさんの方にご来場いただきました。今回の上映作品は、グレートジャーニーシリーズで知られる関野吉晴氏の挑戦に4年間の密着取材と3年間の編集を経て完成した映画で、一緒に航海したクルー達を中心に描かれています。

動力に頼らず人力だけで物を作り航海をする。便利になっていく現代社会で「電気や水道があるのが当たり前！」で過ごしている私達にはとても新鮮で、映画を通して当たり前の大切さに気付かされた作品でした。

近くに海を感じながら壮大な海の冒険のドキュメンタリー映画を上映し、作品を作った

監督の貴重なお話を聞くこともでき、とても有意義な時間を過ごすことができました。



イベント後のアンケートには、「ここで上映することにすごく意味のある作品だと思った」「面白かった」「馬鹿なことをやっているけど、その先に見えてくることがあると言われていたのがすごく心に残った」などたくさんの感想をいただきました。また、ほとんどの方が次回も参加したいと答えていただきイベントを主催して良かったと感じました。

今回の映画を通して、自然の脅威に改めて気付かされたと同時に自然の素晴らしさを感じることができました。私達も新しい何かに挑戦することができるかな?と刺激を受けた一日でした。

休憩時には浜辺にマナヅルが現れ、皆さん写真撮影されていました。世界遺産との貴重なコラボレーションでした。



最後に、今回のイベントにご協力いただいた高浜アイランド様、本当にありがとうございました。
(濱崎明菜)

のもざき着物さるく @ 脇岬地区

長崎市中心部から車を南へ走らせること40分、大きな客船や船が浮かぶ長崎風景とは違う風景が広がる。それが、野母崎脇岬地区です。昔から変わらない長い砂浜を持つ脇岬海水浴場、その奥には漁村として栄えた集落が並び、砂洲という特殊な地形に囲まれたこの地区はいつでも海が側にあります。北側の山の裾野には、県や国に有形文化財として指定された観音像や梵鐘を保有する観音寺が、南側の山には、けんか祭りでも有名な脇岬祇園祭の祭神が鎮座する八坂神社があります。歴史も文化も特殊で深い、それが野母崎脇岬地区です。



「この情緒あふれる風景の中をたくさんのアンティーク着物で歩けば、さらに素敵な風景になるだろう」ということで企画したのが『のもざき着物さるく』でした。



残念ながら雨の中のさるくで、アンティークの着物にとってはいいコンディションではなかったものの、参加いただいた方達やスタッフの皆さんのおかげでとても素晴らしい風景をつくることができました。特に、このイベントには地元の女子中学生にも参加してもらい艶やかな風景に彩りを添えてもらいまし

た！筆筥に眠っていた着物たちがとても嬉しそうに見えました。何より普段より少し大人びた中学生の姿がとても新鮮で印象的でした。



町中を歩くことはかきませんが、観音寺や脇岬海水浴場にあるコミュニティカフェ Ripple 越しの海、西教寺でたくさんの写真を撮ることができました。普段目にしていない風景もアンティーク着物姿の人達が歩くことで時代を遡るような、タイムスリップしたような不思議な感覚に包まれました。次回は晴れた脇岬地区のさるくに挑戦してみたいと思いました。



今回朝早くからたくさんの着付けを笑顔でこなしていただいたキモノホッペン的女将、市原ゆかりさん、石井順子さん本当にありがとうございました。

雨の中、みんなをまとめながら率いてくださったカメラマンの Oto さんにも心より感謝申し上げます。
(菅原真希)

小国町視察

今回は「移住者支援」に重点を置き、12月に小国町視察へ行ってきました。そこでは、今まで数カ所で行われていた移住相談が一本化され、ワンストップ総合窓口「小国暮らしの窓口」での取り組みが特に印象に残りました。小国暮らしの窓口では、不動産屋と情報をシェアして、相談に来た移住者の希望に合わせて地区を選んで紹介をしていました。そして、移住に対してある程度熱意を持っている(本気度が高い)移住希望者には、より多くの情報を提供したり、集落での生活(地元住民とのコミュニケーション)ができそうか、それとも少し距離を置いた方がよさそうかといった細かな配慮を考えたり、相談者によって臨機応変に対応をしていたところなどとても参考になりました。

具体的には相談に来た移住希望者に、予算のことや、仕事はどのようなものがあるか、近くに欲しい施設やお店はあるか、どんな暮らしをしたくて移住したいのかをある程度アンケートで答えてもらい、さらに面談もして聞いておくということでした。通り一遍な対応だと、移住したその後に問題が出てきてしまうようです。窓口が民間に設けられているということも、重要なポイントでした。もし行政が窓口だった場合は、平等性を保つためこういった柔軟性は出しづらいと思います。移住者には親切に対応することは大事なことです。媚びないことも地域をよりよくするために重要なポイントの1つのようなのでした。

インターネットで「しごと」と検索すると、すぐに出てくるサイトがあります。それは、阿蘇小国町仕事情報サイト【シゴツ】。田舎に職が無いと言われていた中、本当にそうなのかと疑問を感じた有志が地域の仕事、求人を

調べあげ、まとめた仕事求人情報サイトです。このサイトには、旧知の仕事はもちろん、今まであまり知られてなかったような仕事も網羅されています。

この点は、今の野母崎にも共通する部分で、とても参考になりました。野母崎でも探してみたら実は色々な仕事があるのですが、まとめて紹介されている情報源が無いのです。

「住」「食」「働」が揃っているということは、移住する決め手となる重要なキーワードです。私自身が移住者でしたので、移住してきた当時のことを振り返ると、この3つのキーワードがハードルでもあったように思います。しかし、月日は流れ、移住者が移住者を迎える立場となった今、この3つのキーワードについての捉え方が変化してきました。「住」…空き家をうまく活用することで整います。

「食」…「海の恵みが食卓に上がるまでの最短コース」が野母崎にはあります。それは、健康的な食生活をも叶えてくれるのです。そして、「働」…田舎の野母崎でも自分で仕事をつくり出したり、潜在している仕事を発掘することはできるのではないのでしょうか。

ありがちな地方都市を目指すのではなく、野母崎の持つ魅力を磨き、さらに見つけていきながら、まずは自分が楽しいライフスタイルを送っていかれたらと思います。

その上で、様々なライフスタイルを模索することが、野母崎での暮らしを楽しむことに繋がっていくように感じます。移住の第一歩は、「自分の足で歩くこと」「話すこと」そして、繋がった縁を「実らせること」、今回の視察で出会った小国町の移住者向けパンフレットに載っているたくさんの笑顔がそのことに気づかせてくれました。

(霜村幸、菅原洋樹、菅原真希)

きまま珈琲部

「ココで珈琲を飲んだら美味しそう！！」
という想いだけを原動力に様々な場所できま
まに珈琲を淹れ、その場所がもつ自然の景観
や雰囲気などを淹れたて珈琲と共に集まるメ
ンバーと楽しみました。珈琲を介してその場
所を楽しむことはもちろん、この部活の真の
目的はそこに集まる人、出会う人との楽しい
時間を過ごすことなのです！！

浜辺、畑、公園や景色が良い展望台などを
メインに活動。桜の咲く時期には桜の下で朝
ごはんの後に、蛍の時期には星空の下、蛍の
光に囲まれてお酒も飲みながら、夕暮れどき
は夕陽を見ながら波止場や展望台で、朝は朝
陽を浴びながら海岸で…など、詳しくは「野
母崎夢塾の地図(Google マップ)」を参照して
ください。



『珈琲を淹れる』だけというお手軽さから、
ごはん部など他の部の活動とのコラボができ
たり、行った先で地元の方々と偶然出くわし
て珈琲を一緒に楽しんだり(お酒もたまに…)、
楽しさと出会いの輪が広がりました。

いつの間にか、季節それぞれの自然を珈琲
片手にずいぶん楽しんでいました。もちろん
そこに集まったみんなとの出会い、他愛ない
話もです。今後も行楽に良さそうな場所を探
し珈琲を淹れ、そして地元の行事とのコラボ
レーションも楽しみ、それをキッカケに生ま
れる出会いや共有する時間を楽しんでいき
たいです。
(菅原洋樹)

お宝部

昔、野母崎は漁業を中心に栄えた漁師町で
した。その栄えた町は現在高齢化、人口減少
により空家が目立ち次々に解体されています。
昔ながらの生活用品や漁具などは家屋廃材と
して処分されています。



それらは現代の人の目から見ると芸術品だ
ったりアンティークだったり・・・
そこで解体現場に出向き「手伝い」と称して
まさしく「お宝」を発掘しました。

家主にとっても廃棄物が減るので喜ばれま
した。



(三浦尋生)

うみ部

昨年に引き続き、今年も「季節外れの海水浴」を楽しみながら検証しました。野母崎の海はいつからいつまで泳げるのか？



塾生数人で体験的検証の結果、5月中旬から10月下旬まで。ただし、8月10日前後から9月初旬に海が荒れるまではクラゲ被害に注意が必要ですが、クラゲを見なくなった後に泳いで感じたことは海がとても温かいということでした。実は海の温度は2ヶ月遅れということで当然のことだったのです。また9月、10月は陽射しも弱まり、真夏ほどには日焼けや熱中症に注意する必要もなくなります。子どもや女性にも最適かもしれません。子どもたちは夏休みしか泳げないようですが、ぜひ海水浴期間を見直して海と親しむ機会を増やしてほしいです。海水浴施設も5ヶ月利用できるとなれば運営も楽になりますし観光資源に最適です。また、スキューバダイビングやシュノーケリングにも最適な場所が多いのも



魅力です。危険生物もいますので注意は必要ですが、気軽に魚などと触れ合えるのはこの地区の魅力です。もちろん、海を満喫するならココに住むのが最高の選択といえます。（三浦豪介）

ごはん部

「野母崎に住んでいたらこんなにおいしく楽しい食事ができる」ということを記録し広めるため始めた活動です。



野母崎では新鮮な季節の食材を廉価で手に入れることができるだけでなく、家から車で10分も走れば、満開の桜の下や、朝日や夕陽に照らされる海を見ながら食事をすることができます。地産地消やフードマイレージという言葉がありますが、「今・ここにあるものを・この場所で食べることを『楽しむ』」ことができれば、それらの問題は解決していくのではないのでしょうか。

それに、食材の生産者を知っていると、自然と「あの人が一生涯懸命捕った魚なんだ」と、人の顔を思い浮かべて調理します。作り手の顔が見える食材は、金銭を対価に交換する食べ物以上の価値を持つと私は思います。また、



地元の方と食事を共にすると、伝統的な漁法や調理法を教えていただけることも

あります。こうした食にまつわる人との繋がりも、大事な「野母崎ならではの」味つけだと思ふのです。

野母崎の食にまつわるさまざまな味わいを集め発信するために、活動は今後も地道に続けていきたいと思っています。（山本春菜）

野母崎夢塾の地図 (右のQRコードからアクセスできます)

これまでの野母崎夢塾の活動や野母崎地区の文化行事、色々なスポット等をインターネット上の地図上にプロットしました。この地図を公開するとともに今後も情報を加えながら野母崎地区の情報源として充実させていく予定です。



うみ部 マップ

- 海水浴 脇岬海水浴場
- スキューダイビング 南古里
- スキューダイビング 南越
- スキューダイビング 赤瀬
- 海水浴 赤瀬
- スキューダイビング 権先
- スキューダイビング 脇岬
- スキューダイビング 高浜

イベントマップ

- のもぎき着物さるく 2017
- のもぎき海辺の映画館2017
- のもぎき海辺の映画館2016
- 星空観察会 2016
- ムーンライトウォーク 2017

土地の特徴

- 赤瀬泊地 プレジャーヨット泊地
- 5億年前の岩が露出
- 野母盆踊り 舞場
- 端島の玄関
- 巨大防波堤
- 漁師町の町並みが残る 脇岬
- 漁師町の町並みが残る 野母畦津
- 漁師町の古い町並みが残る 樺島
- 漁師町の古い町並みが残る 野母里
- ウミガメ 産卵地
- 野母崎ヨット倶楽部
- ガリバー岩
- 白戸の穴



夕焼けポイント

- 📍 夕焼けポイント
- 📍 夕焼けポイント
- 📍 夕焼けポイント 脇岬海水浴場
- 📍 夕焼けポイント 南越
- 📍 夕焼けポイント 野母港
- 📍 夕焼けポイント 南古里
- 📍 夕焼けポイント 榊島灯台

歴史

- 📍 端島の玄関
- 📍 観音禅寺

星のきれいな場所

- ★ 処理場 屋上
- ★ 黒浜-以下宿
- ★ 亜熱帯植物園駐車場
- ★ 権現山駐車場
- ★ 権現山登り口
- ★ 脇岬砂丘

祭り

- 📍 野母盆踊り 舞場
- 📍 野母盆踊り 舞場
- 📍 野母浦祭り（稚児の舞）
- 📍 脇岬祇園祭り（脇岬神社）
- 📍 榊島くんち（ヒューコテンテン）
- 📍 高浜八幡神社秋季大祭
- 📍 のもざき水仙まつり（北側展望台）
- 📍 のもざき伊勢エビまつり（オープニングイベント）

きまま珈琲部

- 📍 榊島展望台
- 📍 榊島灯台公園展望台
- 📍 榊島波止場1
- 📍 榊島波止場2

- 📍 お大師さんの奥
- 📍 灯台行き三叉路
- 📍 祇園山公園
- 📍 きまま焙煎所
- 📍 脇岬波止場
- 📍 植物園の上
- 📍 遠見山（脇岬のトンボロ地形がよく見える）
- 📍 脇岬海水浴場
- 📍 観光いも掘りの畑
- 📍 権現山展望台
- 📍 権現山展望台2
- 📍 灯台公園
- 📍 北側展望台
- 📍 古里トンビ瀬
- 📍 高浜海水浴場
- 📍 黒浜公園
- 📍 アレガ軍艦島横の芝生
- 📍 脇岬ビーチロック



感想文

濱崎明菜

野母崎の将来について考えることから始まった夢塾に参加し、塾生の皆さんと会議で色々なことを話しました。50年後の未来についての結論は簡単に出すことはできませんが、野母崎に住む私達が野母崎の魅力に気づき、ここで暮らしたいと強く思うことが未来に繋がるのではないかと考えました。

野母崎は長崎市内から車で1時間ほど、バスは1時間に1~2本、交通の便はあまり良いとは言えません。でも、私は野母崎が大好きです。青く澄んだ海のそばで波の音を聞きながらゆっくりとした時間を過ごすことができる。満天の星空を眺めることができる。そして何より楽しいことを一緒にできる仲間がたくさん居ます。私は野母崎ですっと暮らしていますが、野母崎夢塾の活動を通じて初めて知ったこと、再発見したことがありました。夜の浜辺に寝そべてみた星空、いつも見上げていた星の名前、月明かりの眩しさ、初めて観た蛍の光、ヨットから観た幻想的な光を放つ夜光虫、ウミガメの産卵など、あげるときりがなくらい、私の知らない野母崎の魅力がいっぱいありました。住んでいる土地について私のように知らない人が沢山いると思います。そんな方々へ素晴らしさを伝えていくことがここで暮らしたいと思うことへの第一歩になるのではと思いました。

野母崎夢塾に参加して自分の視野が広がり、未来について考えることができました。野母崎夢塾で出会った仲間を大切に今後も楽しみながら地域活性化に協力していけたらいいなと思いました。

感想文

小川隆

地元のことを調べていくにあたり昭和36年12月刊の情報誌

「しま」に宮本常一さんの「野母の樺島」という記事を見つけました。宮本さんが樺島に訪れ当時の状況を書き

綴っています。漁業全盛期から下り坂になってきた時代で漁業に代わる産業を模索している状況が描かれています。

その中に、「橋でもかかるといいのですが…」と島の人がこぼすから、「その気になりなさい。わずか300メートルの海に橋のかからぬこともありますまい。ただその橋を観光目当てにかけたのでは意味がない。でき上がった橋がほんとに役にたつ産業をもつことでしょう。」と言う文面があります。まさにその通りだと思いました。観光客は来ているがお金を落とすところがないのが現在の野母崎だと思います。

今後、地域の特性を生かした体験型の観光商品や地元産の商品開発・販売など町ぐるみで行うために「コーディネーター」が必要だと感じています。野母崎夢塾で行なった各イベントでは、塾生がコーディネーターとなり成功を収めることができました。他地区では、民間のコーディネーターが廃校を活用し体験型の観光商品に力を入れているところもあります。人や物を繋ぐコーディネーターを中心に地元が盛り上がる未来であればいいなと思います。最後に、私の野母崎夢塾での活動は、地元の再発見と未来の可能性を感じることが出来た2年間でした。



野母崎に住んではいけない5つの理由

お金がなくても大丈夫に思えてくる。

野母崎は、地場産業が少なく賃金も低い。
でも、居住環境の経費が格安で、時に無料の場合もある。
ご近所のつながりが強く、魚や野菜などをいただくこともある。

それに、野母崎は狭い。

狭いが一応なんでも揃っていて、自転車があれば事足りるのである。

だから、お金をかけなくても楽しく自由に生活できる。

お金がなくても大丈夫に思えてくる。

あわただしい都会になじめなくなる。

野母崎で暮らすと、たまに都会へ行った場合、人込みに恐怖を感じるようになる。

流れに乗って歩行できず、都会の人たちの視線におびえる。

野母崎には長年続く店が多いので、

都会の店の入れ替わりの早さに対応できず途方に暮れる。

そんな、人も街もどんどん変化していく、

あわただしい都会になじめなくなる。

おいしいものしか食べられなくなる。

獲れたての魚や直販所の新鮮野菜に慣れると都会の食事を摂取できなくなる。

しかも、命と直結した食材を日々使うので無駄なく使うようになる。

甘さは富の象徴とされていた時代のなごりで、料理に大量の砂糖を使うようになる。

野母崎クオリティの食に出会うと味覚が変化して、

おいしいものしか食べられなくなる。

すばらしい自然に慣れすぎてしまう。

夕日は赤くてあたりまえ、星は輝いていてあたりまえ、月は明るくてあたりまえ、

風は薫ってあたりまえ、空は広がってあたりまえ、

海は碧くてあたりまえ、波は響いてあたりまえ、鳥は歌ってあたりまえ。

あたりまえすぎて、自然に対する感動が少なくなる。

すばらしい自然に慣れすぎてしまう。

すべて何とかなるから悩まなくなる。

野母崎時間の中で暮らしていると困難に直面した場合、

「明日やればいいさ！」と考えるようになる。

明日にする、問題を先送りするということは、解決までの時間を多くとるということ。

多くの人に問題解決を手伝ってもらえるということ。

そう、くよくよせずに、のんびりおおらかに。

すべて何とかなるから悩まなくなる。

まとめ

『50年後の未来を考える』このことについて議論を深めるために、野母崎夢塾は活動してきました。50年後の未来はどうあるべきか、ということをもとに、それは実に多種多様でした。



野母崎の将来には何が必要なのか。その事を考えることは、人口減少と向き合うことでもありました。

そこで、初年度は福岡県福津市津屋崎地区へ、2年目となる今年度は、熊本県小国町へ視察に行きました。そこでは、行政と民間との連携による空き家の活用や移住者支援など具体的対策がなされていました。

その一方で、それらの事業を十分に生かしていくためには、住んでいる人達の意識の变革が重要ではないかと考えました。今回、出会った人々は、自分達の住んでいる地区の良さを知っていて、楽しんで暮らしていました。土地にある自然とうまく折り合いをつけながら、その土地ならではの歴史や文化を尊重して生きることが大切なのではないでしょうか。利便性や効率の良さを求めた結果が、現代の社会に現れています。もちろん野母崎にもその流れは存在していて、海岸線にはたくさんのテトラポットが並び、山の中には今はもう使われていないダムも存在します。世界文化遺産に一部が登録されている端島(軍艦島)も言い方を変えると近代産業が残した廃墟です。

野母崎にどのような価値があるのかを知ることが野母崎らしさに繋がるのではないかと、その視点で様々なイベントや講演会などを主催してきました。海辺の映画館、星空観察会、亜熱帯植物園での名誉園長の基調講演会、そして今年度は、部活動形式で野母崎を楽しむ活動に取り組み発信してきました。

その結果、利便性や効率の良さと自然は真反対に存在するものではないように感じました。つまり、これからは自然の豊かさを保ちつつも、暮らしの利便性や効率の良さも加味した未来を創造していけるのではないのでしょうか。しかし、そのためには、今を生きる子ども達が自然の重要性に気づく必要があり、その実現のためにも、先ずは大人が自然の重要性に気づくことが大切だと感じています。そこから、伝えたい思い、残していきたい思いが生まれるのではないのでしょうか。

今、全てを決めてしまうのではなく、余白を残しておく。そして今を生きる大人たちが現在の世の中の動向から目を逸らさずに向き合い、野母崎暮らしを楽しみ、伝えることが野母崎の50年後の未来に繋がっていくのだと思っています。(副塾長 菅原真希)

野母崎夢塾

塾長	三浦豪介				
1	井口繭子	21		41	
2	石川仁	22		42	
3	石川実奈	23		43	
4	小川隆	24		44	
5	霜村幸	25		45	
6	菅原洋樹	26		46	
7	菅原真希	27		47	
8	龍山久美子	28		48	
9	西村敏	29		49	
10	濱崎明菜	30		50	
11	林田裕美子	31		51	
12	三浦尋生	32		52	
13	森恵	33		53	
14	山本春菜	34		54	
15	米田利己	35		55	
16		36		56	
17		37		57	
18		38		58	
19		39		59	
20		40		事務局員	野母崎地域センター 岸美恵子